

## 『備えてまっか〜！まさかの時の食—Ⅲ』

平成 26 年 9 月 8 日（月）相愛学園本町学舎講堂にて、大阪府、農林水産省近畿農政局大阪地域センター、相愛大学、大阪青山大学、（公社）大阪府栄養士会主催の『食と防災シンポジウム 2014』が開催されました。テーマは「地域との共助を考える」で、今回で 3 回目となります。講演は、関西大学准教授の越山健治先生から「災害に備えること地域との共助を考える」と題して、災害対策を考える上での常識その 1～その 6 までを解説して頂いた。

その 1、「災害はめったにおこらない」：特に大規模災害は、数十年に 1 度あるかないかで、人間の人生で 1 度あるかないかだから、人間が忘れるのも無理はない…

その 2、「土地は『災害』を覚えている」：水害の起こるところは「繰り返し」起こる。特に大阪は「水害発生地域」である。

その 3、「地震の避難場所と水害の避難場所はちがう」：「避難」とは「危険からの回避」であり「安全な場所」への移動。「地震」と「水害」では「危険の広がり方」が異なるので「避難所」の話は、また別問題。災害を知って有効に「空間」を使う知恵が必要。

その 4、「現在の災害対策は、防ぐだけではやっていけない」：ますます増える災害原因として集中豪雨、熱波、化学薬品、感染症等々。

「防止策」は別々にしなければならぬ。要は「ひとりひとり」が自分に合わせて対策し「災害後」の社会的困難に対して、うまく「切り抜ける」ことが必要な時代。しかし、起きてみないと何が課題になるか分からないのが現状。災害は「不確実性」が高いので、対応できる能力と自由に使える場所が必要。災害社会で「わたしたち自身で」どんなことができるかを考えてみよう！「必要性」より「可能性」。「一般性」より「多様性」。「効率性」より「簡易性」。

その 5、「人は、だれでも『助けたい』」：「災害社会」にみられる友愛性・互助性を生かすも殺すも地域の「空気」次第。都市社会における新たな「共助」の創出を生み出すには『ゆるい繋がり」で、何かを為す関係を』。

その 6、「人は災害に遭うより、支援する機

会の方が圧倒的に多い」：国内外で災害はたくさん発生している。公園を使った「災害対応」は、この地で災害が起きなくてもできるので『意識したらすぐに行動できる社会のあり方』が求められる。「安全」は常に不安と隣り合わせであって「安全」を目指し、獲得していく中に「安心」は存在する。

パネルディスカッションでは関西大学の奥田昌治先生から①関大防災デー「広がれ！みんなの安全・安心！」の取り組みについて、兵庫県立がんセンターの下浦佳之先生からは②地域に貢献する日本栄養士会 JDA-DAT について、相愛大学の坂本廣子先生からは③子育て世代の減災対策について発表して頂きました。また、コメンテーターとして大阪青山大学（大阪府栄養士会会長）の藤原政嘉先生とコーディネーター役として相愛大学の太田美穂先生とでディスカッションが行われました。主な内容：①では 1000 人分の豚汁の炊き出しを経験し、失敗や改善を繰り返し、近隣住民にも参加してもらうことで地域連携の強化に繋がった。②では JDA-DAT リーダー・スタッフ養成や第 16 回国際栄養士会議での活動報告。JDA-DAT 絆プロジェクトの紹介。③では赤ちゃんは硬水では下痢をするので軟水が必要。長期栄養不良（特にタンパク質不足）は脳の発達にも影響する。

今回の参加者は、およそ 450 人で、災害支援医療緊急車両「JDA-DAT 河村号」が初めて大阪にやってくることもあって大盛況でした。これからも栄養士会の一員として、災害時の栄養管理に協力していきます。

（文責 病院 松井欣也）

